

J. パッヘルベル：トッカータ、シャコンヌ

ドイツ、ニュールンベルグに生まれバロック中期に活躍した作曲家、オルガン奏者。パッヘルベルといえば”カノン”が圧倒的に有名だがこれは彼が生涯に書いた唯一のカノンである。他にも多くのオルガン作品を残しているが同時代の北ドイツの代表的なオルガン奏者であるディートリヒ・ブクステフーデとは対照的にイタリアの音楽様式に則った平易な対位法を駆使した明るい音色を用いたスタイルであった。

トッカータ (Toccatà) の語源はイタリア語の「触れる (toccare)」に由来し主に鍵盤楽器による速いパッセージや細かな音形の変化などを伴った即興的な楽曲を指し、技巧的な表現を特徴とする。

シャコンヌは三拍子の舞曲でその起源は中南米と言われていて、定型のオスティナート・バスを持つ変奏曲の形式を持つ。このパッヘルベルのシャコンヌは知名度こそカノンに引けを取るが、パッヘルベルのオルガン作品の最高傑作と評される事もある名曲である。

S. カルク＝エラート：“ドラムとシンバルをもて主をほめたたえよ” (霧生貴之編曲)、月の光

オルガン、ピアノのみならずハルモニウムもこよなく愛したカルク＝エラート、この”ドラムとシンバルをもて主をほめたたえよ”はハルモニウムの為の33のポートレイトの中の作品であり、アメリカオルガン界の女匠、ダイアン・ビッシュが自身のテレビ番組”The Joy of Music”で金管五重奏とオルガンのアレンジで取り上げた。今回はそれを元にしたLe Due Trombe版で演奏する。

月の光は”三つの印象”の中の2番目の作品で、ドビュッシーの月の光に影響を受けており、印象派のスタイルがなかった当時のドイツオルガン界では異色の作品であった。

A. スカルラッティ：セレナータ “愛の楽園”よりシンフォニア

1660年にシチリア島のパレルモで生まれ、ローマとナポリを中心に活躍し、その100曲を遙かに越えるオペラを通じてナポリ楽派の始祖となった人である。セレナータとは、貴族や富裕な市民の邸宅で演じられた小型のオペラのようなもので、ギリシャ神話などを題材とし、特定の人物などを讃えるために作られた。これも恐らくそうしたものの一つで、題材も女神アフロディーテ(ヴェーヌス=ヴェネレ)と美少年アドニス(アドーネ)の愛の物語である。シンフォニアは、トランペットを入れた華やかな主部の間に中間部を置いた、作曲者によって確立された典型的なイタリア風序曲。本日は川田修一がバロックトランペットを使用して演奏する。

B. コリンズ：セイクリッド組曲より “わたしは何をもって主のみ前に行き、高き神を拝すべきか”

コリンズはオーストラリアのトロンボーン奏者&作曲家として近年、多くの金管楽器の作品手がけており、2011年のITGではトランペットとピアノの為のコンサート・ギャロップがテキサス・アンジェロ州立大学教授のジョン・アイリッシュ氏によって初演されている。

このセイクリッド組曲は元々トランペットアンサンブルの為に書かれたもので、それを作曲家本人によりオルガンとトランペットの編成にアレンジされた。表題の”私は何をもって主の前に進み行き”は旧約聖書預言者ミカの詩篇6：6-8 私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。という節である。

これに対し”何が良いことか、何を要求しておられるのか?実は、そのようないけにえではなく、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだって神と共に歩むことなのだ”と主は明確に答えている。

J. アラン：二つのマーチより ホレスとキュリアスのマーチ※、リタニー

モーリス・アンドレとマリー＝クレール・アランの録音といえば誰もが一度は聞いたであろう名盤である。作曲家、オルガン奏者のジュアン・アランはマリー＝クレールの兄であり、多くのオルガン作品を残しているが、第二次世界大戦で従軍し、29歳でその短い生涯を終えた。

今回、演奏されるこの2本のClairons(信号ラッパ)、オルガン、小太鼓の為のマーチは楽器編成の上でも大変珍しく、演奏される機会も極めて少ない作品と言えるであろう。タイトルになっている王朝ローマ期のホラティウス三兄弟とクリアトゥス兄弟の決闘で勝者になったホラティウスの名は祖国ローマへの愛、忠誠の

象徴として長いローマ史を通じて語り継がれた。

リタニーはアランの代表作である。初稿の時点では違う副題が付けられていたが、妹オディールがアルプス山中で遭難、それをきっかけに”リタニー(連禱)”に改題され、スコアの冒頭に次のような序文を添えた。

「キリスト教徒が苦悩に打ちひしがれた時、その魂は神の慈愛を哀願するよりほかに見出しうる言葉はなく、同じように敬虔な祈りを終わることなく繰り返す。理性は限界に達し、魂の飛翔に追いつくのは信仰心ばかりである。」

P. メーチャン：ソング・オブ・ホープ

メーチャンはイギリス生まれの作曲家で、ブラスバンドの作品を中心に金管楽器のアンサンブルやソロ作品なども手がけている。このソング・オブ・ホープのオリジナルはコルネットのためのマイルストーン(マーク・ウィルキンソンに献呈された)の2楽章”Song”を友人のトランペット奏者、レイ・アンソニーが活動しているチャリティー財団”Cancer Blows”(多発性骨髄腫研究のための財団)のチャリティーコンサートで曲のタイトルをSong of Hopeに変えて演奏したいとの依頼を受け、更にエンディングも変え、トランペット3人のソリストバージョンで演奏された。ソリストにはレイ・アンソニー(元カナディアン・ブラス)、デイヴィッド・ビルジャー(ロスフィル首席)、マイケル・ザックス(クリーブランド響首席)という錚々たるメンバーだった。

H=A. シュタム：ファンファーレ-喜びのマーチ-メディテーション-ニース風ダンス

ドイツ、ケルン郊外の工業都市レーヴァークーゼンで生まれたシュタムは幼少の頃よりその類い稀なる才能を発揮し、11歳の時に初ツアー、13歳でCDデビュー、16歳の時にパリのノートルダムでリサイタルデビューを果たした。ヴィルトゥオーゾオルガニストとしてドイツ国内外で活躍しているが、作曲家としても多才で映画音楽を手がける事もある。オルガン作品はもとより、トランペットとの作品も多数に渡り、ケルティックなエッセンスが色濃いその作風はとて親しみやすく、ある種”新しいジャンル”を作り上げたと言えるのではなからうか。本日演奏する4曲は組曲風になっているが複数の作品集からの抜粋である。

J.S. バッハ：コラール前奏曲「おお人よ、汝の大いなる罪に泣け」、前奏曲とフーガ八短調 BWV 549

ドイツの一族総出の音楽家系に生まれたJ.S.バッハはバロック時代最大の音楽家、作曲家、鍵盤演奏家としても高名で250曲以上に渡るオルガン作品はオルガンの最も重要なレパートリーの一つである。

本日演奏される「おお人よ、汝の大いなる罪に泣け」は有名な受難コラールの一つである。歌詞は1530年にゼーバルト・ハイデンによって作詞され、旋律はマティアス・グライターにより作曲された。またバッハはこのコラールをBWV402の4声コラール集とマタイ受難曲にも用いている。

一方、前奏曲とフーガ八短調はアルンシュタット時代初期に書かれたものと思われ、後の作品と比べ作風が大きく異なる事からブクステフーデの影響を受ける以前の作品の可能性があり、その力強いペダルから始まる冒頭のテーマはとて特徴的で有名なトッカータとフーガ二短調BWV 565でのオープニングを予見しているとも言われている。

R. ワーグナー：ニュールンベルグのマイスタージンガーより”前奏曲”

マイスタージンガーが作曲されたのはトリスタンとイゾルテの完成(1859)から3年後の1862年から67年にかけてのことである。ワーグナーはオペラや楽劇を創作するにあたり、まず台本を完成させてから作曲に取り掛かることが多かったが、《マイスタージンガー》に限っては散文稿を書いている途中の1861年頃に突然、イメージが湧いて第1幕への前奏曲の骨格部分を書き上げた。

今回演奏するLDT版はトランペットとオルガンのさらなる可能性に特化したある意味挑戦であり、トランペットだけではなくオルガンにも相当な技術が求められている。高度な対位法が散りばめられているこの名曲を様々な楽器を駆使してどう繰り広げていくか注目して頂きたい。